

川越市立博物館



# 博物館だより

第12号

第5回 収蔵品展より

## 安齊家の幻燈機



種板

東京名所



日露戦争



人体解剖図



忠臣蔵



イソップ物語



ポンチ絵



安齊家の幻燈機

当館では、開館以来毎年収蔵品展を開催しております。今年は7月22日から9月25日までの期間展示を行い、多くの方々のご来館をいただきました。

今回の収蔵品展では「安齊家」という一つのお宅からお預かりしたものを中心に展示し、はじめて家別資料の展示をこころみしました。

ご協力いただきました安齊家の方々に厚く御礼申し上げます。

## 安齊家具について

安齊家具は総数350点あまり、そのうち約100点を展示しましたが、明治から大正時代にかけて川越の町方の生活をかいまみることができたと思います。

さて、安齊家は大手町（旧江戸町）にありました。市役所から南に向かって走る旧川越街道は、川越郵便局の入口のあたりで大きく曲がっていますが、その曲がり角のあたりにどっしりとした外観の木造家屋があったのを覚えていらっしゃる方も多いと思います。右の写真は明治35年に建てられた頃に撮影されたもので、この建物は平成2年までその形をとどめていました。

安齊家は現在の山田地区の出身と伝えられ、幕末ころは農業のかたわら藍玉を商いました。その後、明治20年代に4代目安齊利兵衛を中心に金融業、東陽会社を興しました。大正時代には東京神田区に本社をおき、全国30ヶ所以上の支店、出張所を有するまでに発展しました。

会社の発展に伴って安齊家の人々も本拠地を川越から東京に移したようで、大手町の安齊家は次第に別荘として利用されるようになりました。安齊家から寄託された民具は、生活に密着した民具よりも冠婚葬祭などの人寄せの際に使われたものや趣味・娯楽に関するものが目立ちます。

## 安齊家の幻燈機

そこで今回は、安齊家の民具の中から幻燈機



幻燈機の商標



安齊家の全景

に注目して取り上げたいと思います。

幻燈機とは、ガラスに彩色した種板にランプなどの強い光をあて、凸レンズで拡大した絵を楽しむための装置で、原理は皆さんもよくご存知のスライド投影機と同じです。幻燈機という言葉は、MAGIC LANTERNの訳語で1646年にドイツ人 A・キルヒヤーの著作にでるのが最初とされています。

日本においては、長崎から江戸に入ったオランダ人の話をもとに、染め物の上絵職人だった池田熊吉が、苦心に苦心を重ねて完成し、享和3（1803）年真笑亭都楽の名で「写し絵」として興行を始めました。主に寄席で演じられたようで“うつしゑ都楽”と呼ばれ大評判になりました。明治時代に入っては、都楽の弟子真笑亭都船や玉川文楽らが芸を継承し、寄席や劇場、幻燈会で活躍しました。

大衆芸能として始まった幻燈機ですが、一方文明開化後は、これを教育や啓蒙活動に用いようとする動きもありました。

明治7年、文部省の手島精一は合衆国から幻燈機とスライドをもちかえりましたが、その内容は天文・自然現象・人身解剖・動物であったといいます。文部省は、師範学校に奨励品として頒布したり、また日本教育幻燈会を催したりして普及に力をいれました。

明治20年を過ぎる頃には、幻燈機は一般に流

行するようになります。当時の人々とくに子供たちにとって、暗がり映し出される色彩豊かな絵は、夢か幻でも見ているような気持ちにさせたのかも知れません。値段は安いもので50銭前後種板は2銭から5銭、当時ジャムパンが2銭程だったといえますから、手軽に買えました。

さて、安齊家の幻燈機は本体部分が約横37cm奥行12cm高26cm、これに煙出しの煙突と種板を2コマ連続して送れる替え板がつきます。(表紙参照)後面からは、内蔵の石油ランプを取り出すことができます。このランプは、多少前後に動くようになっており、これとレンズを調整することによって焦点を合わせたのでしょう。前面の下にはラベルがつき〔東京浅草区御蔵前池田都楽 片町幻燈製造舗〕とあります。(前ページ参照)

池田都楽とは、前述の“うつしゑ都楽”のことでしょう。二世都楽も写し絵の興行で名を残し、三世は明治2年に名を継ぎました。三世都楽は浅草蔵前に店を構え、幻燈機や種板の製造をはじめ、またその子四世とともに無料幻燈会を開催するなど普及につとめました。

下の写真は、四世池田都楽がだした「幻燈器械映画定價表」です。安齊家の幻燈機はこの定價表の2号形(甲)に近いので、おそらく四世

の時代に売られたものでしょう。さて定價表によると都楽製の幻燈機は2円から35円で、玩具店などでの売価50銭と比べると高価に感じます。この点について四世都楽は、近ごろの新製造者の虚言を憂い、文化年間から続く自社の豊富な経験を強調しています。そして、「代価の為に教育を誤る方へ一針を呈す“安幻燈買わボンヤリ仕たお客”」と苦言を呈しています。

さて、定價表の表紙には、佛教、衛生、教育農業奨励応用とありますが、安齊家ではどんな幻燈が上演されたのでしょうか。

残された種板は130枚あまり(表紙参照)、内容を見てみると、見せ物の系統を引くかのようなボンチ絵や名所案内、人物、桃太郎、忠臣蔵などの物語、そしておそらく両親が買い与えたであろう理科教材ものや日露戦争など教育関係のものがありました。

安齊家の親戚の方が、昭和のはじめ頃に押し入れの中で幻燈会を開いたことを覚えていらっしゃいました。親しい人々の集いの中でいったいどんなストーリーが語られたのか、興味はつきないところです。

最後に、本稿をまとめるにあたってご指導いただいた石黒敬章氏に厚く御礼申し上げます。

(学芸係 田中敦子)



四世池田都楽「幻燈器械映画定價表」 石黒敬章氏蔵

# 江戸のたそがれ

## ～ 蝙蝠文様にみる幕末～

### 1. はじめに

幕末に流行した意匠のひとつに蝙蝠文様がある。とかく負のイメージをもたれがちな蝙蝠の文様がなぜこの時代に多く用いられるのか、筆者は常々疑問に思っていた。ひとつの意匠が流行するためにはその時代を生きる多くの人々に支持される必要がある。そうした意味で、どんな意匠も作られた時代を反映していると言えるだろう。本稿では器や調度、衣装などにくらしのデザインとして用いられた蝙蝠たちを取り上げ、幕末という時代を考えてみたいと思う。

### 2. 器に描かれた蝙蝠文様

まず、陶磁器に描かれた蝙蝠文様について見てみよう。第1図は、当館所蔵の染付花唐草鳳凰文中鉢である。本品はいわゆる旬干形の中鉢で、19世紀前葉に肥前で焼造された製品と考えられる。文様は内面に花唐草と2羽の鳳凰を巡らせ、見込には草花文を配する。外面には唐草文風の桃樹の間に2匹の蝙蝠が描かれている。

こうした桃樹と蝙蝠の取り合わせは中国清朝の陶磁器にその原型が見られる。中国において桃は聖なる果実として長寿のシンボルであった。また、蝙蝠は「福」と同音であることから吉祥文として尊ばれた。桃樹と蝙蝠を組み合わせた本品の文様は、吉祥文としての中国の蝙蝠文様を忠実になぞっているものと言えよう。

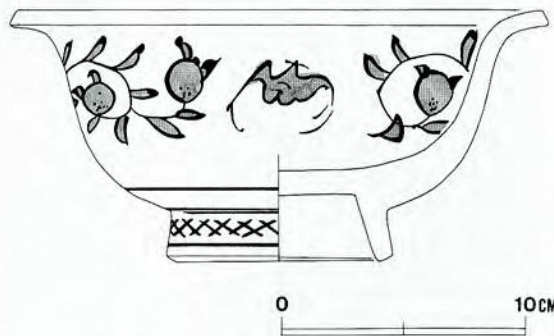
### 3. 調度に描かれた蝙蝠文様

市内幸町の服部民俗資料館には、蝙蝠の綱渡りの意匠をもつ円座が保存されている。今回、御当主服部新助氏のご厚意により実測調査を行わせていただいた(第2図)。本品は紙製・漆塗りで革に似た質感をもっている。おそらく舶来の金唐革を意識したものだろう。円座の表には烏帽子を被り、扇と鈴を執って綱渡りする蝙蝠とそれを扇で指し示す蛙の姿が型押しされている。

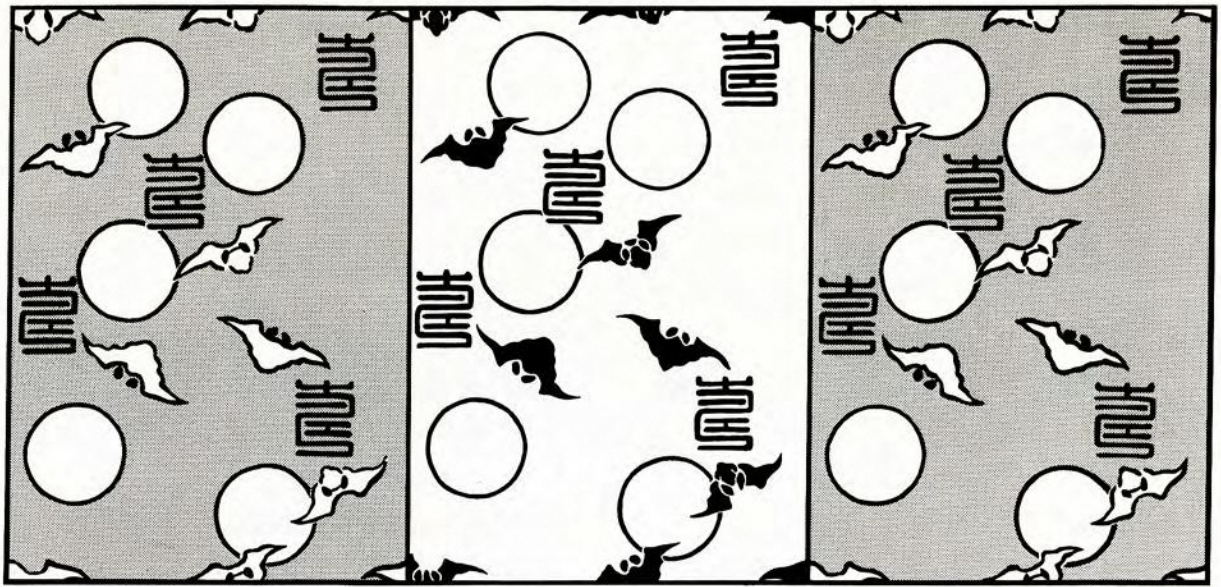
この意匠は、前に述べた吉祥文としての蝙蝠とは明らかに異なった意図でデザインされている。蝙蝠や蛙を擬人化し軽業の一座に見立てる趣向は、当時の戯作文学のもっていた諧謔性に通じる。これに類似したモチーフは幕末から明治の画家、河鍋晩斎の戯画などにも見られる。

### 4. 衣装に描かれた蝙蝠文様

蝙蝠の意匠は幕末の人々の衣装のデザインにも取り入れられている。ここでは天保6(1835)年刊行の葛飾北斎『萬職図考 第三編』の中に浴衣・間着の意匠として描かれた蝙蝠文様を取り上げることとする(第3図)。この文様は、蝙蝠の絵と丸印と寿の文字を組み合わせで構成されている。蝙蝠は発音が同じことから福、丸



第1図 染付花唐草文中鉢(1:3) 当館蔵



第3図 福禄寿文様（葛飾北斎『萬職図考 第三編』より）

印は禄、寿の文字はそのまま寿とそれぞれ判じ、「福禄寿」と読ませる。

このように文様や記号、文字などを組み合わせて寓意や言葉を表した意匠は、目で楽しむデザイン的ななぞなぞと言えよう。これは、幕末に流行した「判じ物（絵）」を衣装の文様に応用したものと考えられる。

### 5. 蝙蝠文様と幕末社会

中国で招福のシンボルであった蝙蝠文様を、日本人はおおらかに受け入れ、遊び心と知的な着想で意匠上に表現した。ではこうした蝙蝠文様の受容と変形にはどんな背景があったのだろうか？幕末の人々の心について考えてみたい。

幕末を秩序の崩壊に対する人々の不安が生み出した頹廢的な文化とする評価がある。「たそがれ—終焉—死」という負のイメージにつながる蝙蝠を意匠として用いたのには猥雑で珍奇なものをおもった風潮があるのかもしれない。また一方で、幕末を人間性を追求した遊びと好奇心の時代と見る立場もある。人々は趣向を凝らし、グロテスクな蝙蝠の姿をユーモラスな文様に読み替えた。こうした逆説的なおもしろさは、戯作のもつ諧謔性が大きな影響を与えている。



0 10cm

第2図 円座（1：7） 服部民俗資料館蔵

このようにして、おどけた蝙蝠たちのデザインが幕末という江戸のたそがれに飛び交うこととなる。そして、明治維新を迎え人々の心が次第に江戸の美意識から離れてゆくようになると蝙蝠たちの意匠は姿を消すのである。

（学芸係 岡田 賢治）

# 社会教育と博物館(7)

## 第2土曜体験教室

学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する、諸施設と協力し、その活動を援助すること。(博物館法第3条1項より)

学校週5日制がスタートし2年が経過しようとしています。開始にあたっては、明治以来の大へんな改革でありますので、多くの議論をよびました。現在では、かなり定着してきた感があります。

この制度は、確実に子供たちにゆとりの時間を確保できました。この時間の使い方についてはさまざまですが、家族と過ごす時間としての利用もふえています。

博物館のような公共施設では、家族での来館者の増加を期待し、また、より積極的に博物館へ招こうと、さまざまな試みがなされてきました。学校ではなかなかできないような体験を重視したものや、より専門的な事業が子供向けに工夫されています。

川越市立博物館でも体験を重視した内容で実施してまいりました。

### 平成6年度の予定

4月鎧を着よう	10月手作り玩具
5月火起しに挑戦	11月泥面子で遊ぼう
6月泥面子で遊ぼう	12月火起しに挑戦
7月燻蒸休館	1月鎧を着よう
8月切り紙あそび	2月切り紙あそび
9月わらなわづくり	3月わらなわづくり

**鎧を着る** 室町末期を想定した体験用の鎧を着用し記念写真を撮ります。今年から陣幕、采配も加わり一段と充実しました。後日写真をお送りし参加者から大変好評です。

**火起しに挑戦** まいぎり(紐で軸木を回転させる方法)で火を起します。煙から炎を作るまでが大変です。

**泥面子で遊ぼう** 紙ではなく泥で作った面子を目標にむかって投げたりして遊びます。動物や人物を模して作った可愛い面子です。

**切り絵遊び** 折紙を色々と工夫して折ります。その上から、さまざまな形を描き切り取りますと、さくら、きくなどおもしろ絵柄ができあがります。

**わらなわづくり** 年配の方の指導を受け、わらをよっていくと縄ができあがります。

**手作り玩具** 竹を素材にして伝統的な遊び道具を作って楽しむことができます。

このように博物館の事業に対する参加状況は次のような状況です。(6月11日泥面子で遊ぼうの場合) 参加者総数 70人

年齢 幼児 7人

小学生 51人(参加率 42%)

中学生 2人(参加率 5%)

大人 10人(参加率 2%)

(参加率は全入場者数に対する割合)

このなかで市内は57%、市外43%となっています。同伴者は家族で参加41%友達と27%となっています。市内でしかも家族で楽しむようすがわかります。

小・中学生全体の数から比べて博物館へ足を運ぶ人の数は少ないのですが、子供たちに親しめる博物館活動をつづけ、歴史や文化財に対する関心を高めていきたいと考えています。

(教育普及係長 水谷 薫)



わらなわづくり

## 学校教育と博物館(8) 博物館利用研究委員会

博物館は、その事業を行うに当たっては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助しようようにも留意しなければならない。(博物館法第3条第2項より)

博物館が学校教育との連携を進めるにあたり、その中核を担っている博物館利用研究委員会の活動について紹介します。

博物館利用研究委員会は、市内の小・中学校が地域の実態に即した教育活動を行い、「我が国の文化と伝統の尊重と国際理解」の推進を図る一助とするために設置されました。人文系歴史博物館という性格から、社会科をはじめ活用可能な教科・領域の先生が22名により組織されています(図1)。そして、城南中学校校長浅井重昭委員長、福原小学校教頭真仁田美智子副委員長の指導の下、「博物館や市内の文化財を、学校教育のどのような場でどのように活用できるか。」という内容で、専門部会毎に意欲的かつ具体的に研究が推進されています(表1)。

さらに、研究の成果を各学校に広めるための手だてとして、博物館活用の手引「やまぶき」を発行し市内の全ての先生方に配布するとともに、博物館活用指導者研修会で研究内容の発表を行っています。

(図1)「博物館利用研究委員会の組織」(平成6年度)



\*各教科領域部会の表の数字は、「小学校(前)・中学校(後)」

(表1)「各専門部会の研究テーマ」(平成5・6年度)

国語	川越ゆかりの短歌を生かした学習指導
社会	博物館を授業に活用するための学習シートの作成

生活	博物館を活用した授業の指導案作成
英語	文化財の英語による解説の検討
音楽	郷土・わらべうたを素材にした教材の開発
図工・美術	郷土川越を描く美術展の検討
道徳	「郷土を愛する心を育てる道徳」授業実践
特別活動	昔の遊び道具を使った活動の研究

活動を始めてから6年目を迎え、研究も充実してきました。その事例として道徳部会の活動を紹介します。

道徳部会では、「郷土を愛する心」を育てる道徳の時間の指導が一層効果的に実施されるよう、児童・生徒の生活の基盤である川越市内の文化財とそれに関わる人々の努力の資料化に力を入れてきました。そして、博物館や蔵造り資料館の展示資料や文化財調査報告書の検討、聞き取り調査等を行い、郷土資料「蔵造りを見上げて」を作成しました。(資料作成の詳細は、「やまぶき」参照。)次に、高階中学校の協力を得て、田中巖先生による授業研究会を行い、地域の特徴を生かした資料の作成・活用が生徒の道徳性を高めるのに効果的であることを実践的に検証しました。2月に開催された博物館活用指導者研修会では、自作資料を活用した授業の成果を市内の先生方に発表しました。

(教育普及係 平野 秀昭)



高階中学校の授業風景

## ~~~~~でかけてみよう~~~~~

平成7年1月15日(日)に野外博物館教室を開催いたします。今回は、南大塚の餅つき踊り(県指定無形民俗文化財)と山王塚(市指定史跡)を歩きます。冬の澄みきった空気の中で、文化財と触れあう一日を過ごしてみましよう。

〈申込み方法〉

平成7年1月5日(木)午前9時から市立博物館で受付をおこないます。(電話可)定員は先着30人で、市内在住か在勤の方に限らせていただきます。



南大塚の餅つき踊り

### 資料寄贈者名簿

敬称略 順不同

H4年	岡村 昭子												
H5年	落合 正夫	平野 一郎	柴崎 重夫	関根 友吉	続木 徳一	有山 光平							
	増田伝次郎	平野 幸子	竹間あい子	神山 守	須賀 政吉	橋本 淳							
	坂本源之助	滝島 徳重	戸田 俊治	大沢 東洋	武田 浩之	加畑 英男							
	矢島 一明	小久保三郎	福島 寛	渡辺 覚造	阿部佐太郎	岩沢 伊善							
	牛窪 義次	吉川 啓助	川越市立高階中学校	久保田哲男	横田 章二	武内喜久江							
	大沢まさこ	原澤 勇吉	板金組合	深井えり子									

資料をご寄贈いただき厚く御礼申し上げます。平成6年以降は次号以降でご紹介します。

ご寄贈いただいた資料は、今後「収蔵品展」等でご紹介させていただきます。

### 🌸 利用状況 🌸

(単位：人)

月	一般			団体			共通				その他		合計
	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	他館購入	招待	免除	
3月	2,674	249	395	655	0	41	2,101	139	189	3,909	101	2,914	13,367
4月	3,396	283	528	330	0	0	3,423	424	203	5,429	142	1,722	15,880
5月	4,287	331	660	362	0	20	4,514	223	403	7,644	178	6,789	25,411
6月	2,235	253	214	640	38	66	2,294	133	65	3,110	94	7,640	16,782

発行日 平成6年12月6日

発行 川越市立博物館

〒350 川越市郭町2丁目30番1号  
TEL 0492-22-5399